

アサ利用の民俗学的研究

縄文時代のアサ利用を考えるために

Folkloric Study of Hemp Utilization :
To Investigate the Usage of Hemp in the Jomon Period

篠崎茂雄

SHINOZAKI Shigeo

はじめに

- ①植物としてのアサとその歴史
- ②アサの利用
- ③各地のアサの栽培,加工方法
- ④縄文時代のアサの生産と利用を考えるために

おわりに

【論文要旨】

かつてアサは全国各地で生産されていた。江戸から昭和初期にかけての栃木県や長野県、広島県などでは商品作物として生産され、茎から得られた繊維は下駄の鼻緒の芯繩や漁網、網などに加工された。また、木綿の生産に適さない東北地方や中部地方の山間地では、少なくとも戦前まで、自給用にアサを生産し、衣類などに加工していた。アサは特別な力が宿る植物と考えられていたことから信仰の用具としても重要である。赤ん坊の臍の緒を切る糸や結納の友白髪などに使用され、祭礼においても欠かすことができない。さらに、実からは油を採取することができ、食用としても利用された。

アサの栽培目的は繊維の採取と実の採取の2つが考えられているが、民俗事例を見る限り、両者は分けて考える必要がある。繊維を採取するためのアサは、枝分かれを防ぐために密植し、花が咲く前に収穫する。そして、冷涼でやせ地の方が良質な繊維が採取できる。逆に、実を採取するためのアサは肥沃な土地の方が有利であり、枝分かれを促すために疎に植える。

アサから繊維を採るためには、茎から皮を剥がさなければならない。多くの地域では、大型の釜や桶を用いて、茎を煮たり、蒸したりすることでこれを行ってきた。しかし、水につけたり、草を被せて温度を高めたりすることだけでも皮を剥ぐことはでき、したがって、特別な道具がなくてもアサの加工は可能である。そして、福島県や宮城県では現在もこの方法を用いている。そこからさらに良質な繊維を得るためには、竹や木、金属などで皮を擦り、カスを落とさなければならない。栃木県では古くは竹を割ったもの、広島県や宮崎県などでは竹で箸状の用具を作ってこの作業を行ってきたが、それらの材料の多くは、近くの山林から入手でき、自分で製作可能な自給民具である。また、実の採取においても、特別な道具は必要としない。

以上のことから、縄文時代にアサが生育していたらならば、それを加工し、利用することは可能であつたろう。

【キーワード】 植物としてのアサ、繊維採取用のアサと実採取用のアサ、アサの加工方法、商品作物と自給作物、自給民具